

平成 30 年度 開智国際大学卒業式 学長式辞（抜粋）

花の便りも聞こえてくる穏やかな春の日に、ご来賓の方々のご列席を仰ぎ、平成 30 年度の卒業式を執り行うことができますこと、光栄に、うれしく存じます。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとう。卒業される皆さんを今日まで、物心両面で支えてこられた、保護者の皆様、関係者の皆様のお喜びに思いを馳せながら、ご列席に感謝いたしますとともに、心よりお祝い申し上げます。

皆さんが入学されてからの 4 年間に、日本の社会はさまざまな変化を遂げてきました。2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、着々と準備が進められ、スポーツ施設の建設やボランティアの募集など、いよいよその日が近づいている興奮を覚えます。久しぶりに世界の中の日本を意識する、明るく楽しみな出来事ですね。

しかし、一方では、目を覆うばかりの暴挙や殺戮が繰り返され、難民の問題、アメリカのトランプ大統領の自国優先主義、中国の習近平、ロシアのプーチン大統領のリーダーシップなど、日々報道されるニュースから目を離せない不安定な世界情勢の中で、日本も大国として責任を持った発言が求められ、日米関係はもちろん隣国の中国や韓国、北朝鮮との関係においても、日本の立ち位置を明確にした発言が求められています。

国内においても、基地の問題、原子力発電をどうするのか、少子高齢化社会の到来、グローバル化による新たな問題など、日本を取り巻く政治的・経済的、社会的な課題は、かつて経験したことがないほど大きく膨らんでいます。

さらに、人工知能の開発など、人類にとって新たな課題が突き付けられ、とりわけ若い人たちは、人生に夢を描きにくい、厳しい状況に置かれています。こんなに厳しい時代にどう生きていけばよいのでしょうか？ 私は、今日、こんな時代だからこそ「別解力」の大切さをお伝えして、はなむけの言葉といたします。

「別解力」は、長野県にある諏訪中央病院の名誉院長、鎌田實氏の言葉です。鎌田医師は、約 50 年前、東京医科歯科大学の学生であったころ、全共闘と呼ばれる激しい学生運動の闘志家のリーダーとして、国家権力と闘っていました。当時は、医学部が中心となって、国立大学をはじめ多くの大学でこのような学生運動が繰り返されていました。

国立大学の医学部を卒業し、医師免許を持っていても、権力に反抗する立場の人

には、病院での就職口はなかなか見つかりません。ようやく見つかった就職先は、閉鎖寸前の長野県の諏訪中央病院だったのです。鎌田医師は、なるべく注射をしない、薬を出さないという主義で医療を徹底して続けた結果、当然のことながら、患者は減っていきました。ここへ来れば注射がしてもらえ、薬が山のようにもらえると思い、それを楽しみに、お年寄りが集まってきていたのです。鎌田医師は、注射を打ちつづけ、薬漬けにする医療はしなかったのですが、生活改善運動による健康作り、あるいは、末期ガン患者の、それぞれの状況に合わせたターミナルケア、特に在宅医療は、看護師の協力を得て、どんどん進めていきました。地域に根を張る医療です。

病院は、病気の人がたくさんいて成り立つものだと考えがちですが、鎌田医師は、病院が中心となって、病気の人を減らそうと地域の人々を啓蒙してきたのです。今ではどの病院でも当たり前に行っている啓蒙活動ですが、50年前には極めて稀なことでした。当時の常識から考えると、病院の経営はますます悪化し、赤字がどんどん膨らんでいくはずなのですが、地域の人々は、病院の医師や看護師とともに、生活改善に真剣に取り組んだのです。その結果、病気をしてもしなくても、鎌田医師のもとに人々が日常的に訪れるようになり、病院は黒字経営に変わっていきました。

赤字の病院を立て直すには、出来るだけ患者の要求に応え、先端医療に基づいて注射や薬による治療を行い、患者を増やすことが一般的には正しい、すなわち正解「○」だとしたら、患者の望む医療をあえてしない鎌田医師の医療行為は間違っている、すなわち不正解「×」だということになるでしょう。しかし、鎌田医師は、注射や薬による治療はしていないけれど、生活改善を指導し、病気にならない体づくりという別の解答「△」を示したのです。「もうける」ことを最優先にする資本主義の正解から、21世紀の新しい資本主義の「別解」を考えました。人に優しく温かいことをしていれば、必ず住民から受け入れられ、人々はその存在を認め、病院事業も安定し、最終的には利益は上がってくる、という信念に基づいて、鎌田医師は、病院を地域医療の拠点に育てていきました。今では諏訪の地であって、なくてはならない病院になっています。鎌田医師は、著書『○に近い△を生きる』の中で、△の生き方について語っています。「今の日本に必要なのは、「別解力」。たった一つの「正解」に縛られるのではなく、いくつもある「別解」の中から○に近い△を見つけていきましょう。」と語りかけています。

鎌田医師の語る別解力「△」は、実は皆さんが本学で受けてこられたアクティブ・ラーニング式授業の中で、育まれる力なのです。テーマや課題・プロジェクト

に対して、「情報やデータを収集し、それを読み込んで理解し、時にはグループで時には自分と向き合っ、意見をまとめ上げて発表する」というプロセスを、皆さんは当たり前のように進めてこられたと思います。これはすべての大学で行っている授業方法ではありません。講義式授業の方が、先生にとっては進めやすいのですが、本学では、他大学に先駆けて、先生方が熱心に取り組み実践して来られた授業スタイルなのです。

高校までは、○か×か、どうすれば正解「○」の数を増やせるのか、そればかりを気にしながら勉強して来られた、と思います。しかし、本学の授業では、自分の意見を作り上げて発表することが多かったことでしょう。

「ちがうよ、それは」と言われるのではないかと最初は恐る恐る発表してみたら、「なるほど！ そういう考えもあるんだ」「その考えは面白い」「私からは生まれてこない考え方です」などと思いがけない反応が、先生や仲間から返ってきて、少しずつ自分の考え方に自信をもてるようになり、発言していくことが楽しくなっていたのではないのでしょうか。それこそ別解力です。

鎌田医師の「○に近い△を生きる」生き方は、皆さんはこの4年間を通してしっかり身に付けてこられました。本学での4年間は、皆さんお一人お一人を、じっくり成長させた4年間であり、別解力「△」を育まれた4年間であったと思います。

社会人となられても、本学で身に付けられた別解力にさらに磨きをかけて、さまざまな状況や課題にチャレンジしてください。

今日、卒業の日を迎えられたのは、ご両親をはじめとする保護者の皆様のお支えがあったからこそです。感謝の気持ちを伝えましょう。心で思っ、いても通じません。「ありがとうございました」と言葉ではっきり伝えましょう。「ありがとう」は、これからの人生にとっても最大のキーワードです。

教職員一同、いつでも、皆さんをお待ちしております。いつでもどうぞ訪ねてください。本学の卒業生として誇りをもって活動してもらえよう、私たち教職員は一丸となって、さらに良い大学を目指して努力を続けてまいります。私たちも頑張ります。皆さんもお体に気をつけて、それぞれの場で活躍してください。

皆さんのご卒業と社会人としての門出を祝福し、式辞といたします。

平成31年3月20日

学長 北垣 日出子